「死刑囚表現展 2020」のチラシ

裸の心がさらせない……
死刑囚の表現が伝えるもの
死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）
東京都荒川区南千住1-59-6-302
http://sobanokai.my.coocan.jp/

ある日、あなたの幼馴染（おさなじみ）や学生時代の友人が「殺人犯」として逮捕されてしまったら、どんなにショックなことでしょう。何年も会っていなかったけれど、そんな事件を起こすような人には思えません。

マスコミでは、裁判が始まってもいないのに、その犯行の残忍さが事細かに報じられ、「容疑者」として紹介される人物の写真は、まぎれもなくその人です。心配していることを伝えようにも、接見禁止処分がついていて、一般人との面会や文通は許可されていないようです。

やっと始まった裁判は、傍聴券が抽選で、動員されたバイトが大勢並ぶらしく、仕事を休んで駆けつけても無駄足になりそうです。

死刑判決が確定したというニュースを目にして、あなたは久しぶりにその人のことを思い出します。ずっと疑問だったことを、改めて聞いてみたくなりました。「なぜ、あんな事件を起こしたのですか？」

★☆★

死刑確定囚になってしまうと、家族ででもない限り、会って話すことも、手紙を交わすこともできません。仮に会えたとして、あるいは手紙が届いたとして、ストレートに「なぜ、あんな事件を起こしたのですか？」と尋ねたら、どんな答えが返ってきたでしょうか。

もしかしたら「それがわかっていたら、やっていなかったよ」と言うかもしれません。

★☆★

10月に「死刑廃止のための大道寺幸子・赤堀政夫基金」の「死刑囚表現展２０２０」が都内で開催され、３日間という短期間でしたが２千人もの人たちが訪れ、死刑囚から寄せられた絵画等の作品に見入っていきました。

「津久井やまゆり園」の施設で多数の入所者を殺傷した死刑囚の応募もあり、それが様々なメディアで紹介され話題を呼んだようです。

その作品は安楽死の法制化や大麻合法化などの彼の主張を記したものでした。「殺された被害者は何も言えないのに、死刑囚にはこんな勝手な表現が許されてよいのか？」という疑問や批判の声もありました。

★☆★

しかし、人の心＝内面は表現されなければ伝わりません。そして、複雑な思いを表現するために様々な芸術作品は生まれ、鑑賞されてきました。

「死刑囚の表現展」は16回目になりますが、毎年、選考委員会での議論の内容の他、会場アンケート等に記された一般参加者の感想・批判なども含め応募者＝死刑囚に伝えるよう努めてきました。時間のかかることではありますが、こうした交流を経ながら、応募作品に死刑囚の自省の深まりが反映されてきたように見えることもあります。

裸の心は簡単にさらせるものではありません。死刑囚も、あなたも。（J）